



株式会社竹中工務店  
取締役執行役員社長

さ  
さ  
き  
ま  
さ  
と  
  
佐々木  
正  
人  
氏

## 棟梁精神を受け継ぎ 最良の作品を世に遺し社会に貢献

手がけた建物を「作品」と呼び、「最良の作品を世に遺し、社会に貢献する」を経営理念に掲げる竹中工務店。創業400年・会社創立120年以上の長い歴史を持つ同社は、建築文化の発信・振興に加え、人材育成や地域活性化にも積極的に取り組んでいる。そうした活動や社業を通じた文化への思いについて、当協会理事長の崎元利樹が伺った。

### 「工務店」に込めた思い

**崎元** 御社は、会社創立以来「竹中工務店」という社名でやってこられました。このお名前には、どのような思いが込められているのでしょうか。

**佐々木** 当社の社名は、合名会社を設立した1909年につけられました。建築専業で、設計と施工は切り離せないという

宮大工の棟梁精神と伝統を受け継ぐ当社では、その考えを「工務」という言葉で表し、それにお客さまを大切に思う思いから「店」を付けて「工務店」としたのです。お客さまのご注文に応じて良い作品（建物）をお渡しするためには、良い施工をしなければならぬし、そのためには良い企画・設計をしなければなりません。社名には、そうした一連の仕事を自分たちの手で最善かつ責任を持って行うのだという決意が込められているのです。

**崎元** 建築業界には「BCS賞\*」というのがあります。発案されたのは御社の創立者である竹中藤右衛門さんですね。

**佐々木** そうですね。BCS賞は、建築主様と設計者、施工者の三位一体による優れた建築作品を表彰するものです。単

にデザインが良いというだけで判断せず、完成後も良い建物として社会の中で生きている状態を重視します。これは当社の経営理念にも通じるものです。

\*BCS賞:「優秀な建築物をつくり出すためには、デザインだけでなく施工技術も重要であり、建築主、設計者、施工者の三者による理解と協力が必要」という建築業協会初代理事長竹中藤右衛門氏の発意により、昭和35(1960)年に創設された賞。

**崎元** 建築と社会とのかかわりでいうと、御社は「まちづくり総合エンジニアリング企業」を掲げて活動されています。具体的にはどういうことでしょうか。

**佐々木** 竹中工務店は建物をつくる会社ですが、グループ全体としては土木やファシリティマネジメント（施設と周辺環境の総合的な管理・運営）、エンジニアリング、不動産などの関連企業が数多くあります。これら各社が緊密に連携し、それぞれの専門力を活かしてまちづくりの構想から建築、維持管理にいたるまで、お客さまや社会の最良のパートナーになりたいと考えています。そして、建物をつくった後も、メンテナンスやリニューアルを通して次の時代へと受け継ぎ、サステナブル社会の実現に寄与していくことを目指しています。

併せて、事業領域を建築単体から「まち」へと広げることを視野に入れています。そのようななかで、地方都市の活性化等にも役に立ちたいという思いから、2019年に鳥根県雲南市と地域連携協定を結び、当社が持つ知見やノウハウを地域課題の解決に活かさせていただこうとしています。これも「まちづくり総合エンジニアリング企業」としての趣旨に沿ったものです。

**崎元** 話は変わりますが、今、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、さまざまな業種・業界が苦境に立たされています。建設業界ではいかがでしょうか。

**佐々木** 鉄道業や観光業のように直接的な打撃を受けている業界に比べると、建設業界への影響はまだ小さいという印象です。リーマンショックのときも金融業界はすぐに打撃を受けましたが、それが産業界に波及して設備投資や住宅着工数が減少し、建設業界が不景気に陥ったのは2年ほど経ってからでした。だから今後は気が抜けません。建設業界は請負仕事ですし、景気の波に左右されます。新型コロナの影響が長引いて社会経済活動が低下すれば、建築や設備投資を控えようという動きになり、経営環境は厳しくなるでしょう。

## 環境共生地域のシンボル

**崎元** 手がけられた建物を「作品」と呼ばれる御社では、建築と文化の関わりをどのようにお考えでしょうか。

**佐々木** 住宅、事務所、ホテル、学校、工場などのさまざまな建物と、それらが連なっている「まちなみ」は、日本の気候風土や社会経済活動を反映した文化です。当社は建築主様と一緒に最良の作品を世に遺すことで、まちなみから生まれる文化を発信し、次代につなげていくことに意義をおいています。

**崎元** そうしたご活動に数々のメセナアワード(公益社団法人企業メセナ協議会)が贈られ、社外から高く評価されていますね。なかでも「聴竹居」は、2019年度のメセナ大賞を受賞されました。



聴竹居 (国指定重要文化財)

**佐々木** 聴竹居は、当社に在籍後に京都帝国大学教授(工学部建築学科)になった藤井厚二氏が、1928年に京都府・大山崎町に建てた自邸です。日本の気候風土に合い、日本人の身体に適した住宅を追い求めた藤井氏の研究の集大成といっていでしょう。木造建築の伝統を随所に盛り込みつつ、日本の暑い夏を快適に過ごすよう地下の冷気を取り込むチューブを埋め込んだり、西洋式のテーブルで食事ができる居間や、子ども部屋のような個室、今でいうダイニングキッチンのようなシステムをつくったりして、当時としては最先端の生活様式も取り入れています。藤井氏は、聴竹居の周辺でこうした環境共生住宅をいくつかつくっています。地元の方々から「まちのシンボルとなるのでは非遺してほしい」という声が上がリ、当社の創立120周年記念事業の一環として2016年に取得しました。ありがたいことに、聴竹居の公開やガイドなどは聴竹



## 聞き手 崎元利樹

公益財団法人 関西・大阪21世紀協会 理事長

居を愛し地域を誇りに思う地元住民を中心とした一般社団法人聴竹居倶楽部の方々が行ってくださっています。

また、聴竹居がある大山崎町には、豊かな自然環境に加え、千利休の茶室「待庵」(国宝)や、サントリー山崎蒸溜所、アサヒビール大山崎山荘美術館、重要文化財の「宝積寺」など、観光資源も豊富です。まちづくり総合エンジニアリング企業として、それらと合わせて、まち全体の魅力向上につなげていければと思っています。

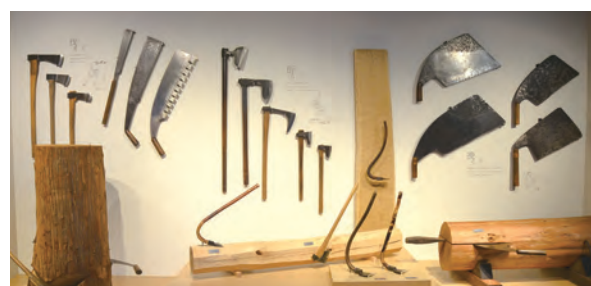
## 工匠の心と技を伝える

**崎元** 御社では建物をつくる大工道具も収集・保存されています。先日「竹中大工道具館」を見学させていただき、世界に誇る日本の木造建築文化を伝える、御社ならではの思いを感じました。

**佐々木** 竹中大工道具館は、当社の故竹中錬一相談役(創立者・竹中藤右衛門の長男)の発案で、1984年に設立されました。大工道具が手動から電動に変わる時代にあって、放っておいたら名工の大工道具が朽ち果ててしまうという危機感から、博物館を建てて優れた職人の精神と技術を後世に伝えようと考えたのです。収集した大工道具は35,000点におよび、そのうちの約1,000点を展示しています。2014年に、かつて当社が本社を置いていた神戸市中央区に新築して移転しました。

**崎元** 建物自体も素晴らしく、年によっては国内外から6万人を超す入館者があったと伺いました。日本の木造建築をつくる知

恵と技術が勉強になりますし、子どもたちの工作ワークショップも開かれると聞いて、親子でも楽しめると思いました。



竹中大工道具館 (神戸市中央区)

## 建築を取り巻く文化を発信

**崎元** 御社では、季刊誌『approach』の発行や『ギャラリーエークウッド』（東京都江東区）でのイベント企画など、建築文化を発信するさまざまな活動をされています。これにはどのような思いが込められているのでしょうか。

**佐々木** 『approach』には、「当社と建築、都市、社会とが相互にアプローチし、交流することを願う」という思いが込められています。特集テーマや記事企画を外部の方をお願いすることで、手前味噌になりがちな企業PR色を払拭しています。建築を取り巻く社会や自然、文化、歴史など、幅広い視野に立った内容で、私たち自身が気付かされることも多いですね。



季刊誌『approach』  
1964年に創刊され、2020年冬号で第232号を数える。毎号11,000部を印刷し、竹中工務店の顧客のほか、国の研究機関や大学などにも配布。



ギャラリー エークウッド  
(東京都江東区)  
撮影：光齋昇馬

『ギャラリーエークウッド』は、現代の建築文化を広く発信することを目的に、当社の東京本店の1階に開設しています。多くの人に建築を含めた文化に関心を持ってもらえるよう、展覧会や講演会、ワークショップなどユニークな企画を数多く行っています。例えば『100人の撮影会』というシリーズ企画では、一般参加者100人や招待者の方々に、レンズ付フィルムで東京都内の心に残る風景を撮ってきてもらい、その写真展を開催しています。これまでに浅草や日本橋、本郷など各所で撮影会を行い、数多くの写真が集まりました。

**崎元** 地域それぞれに歴史や文化を物語る景観があり、建物はその重要な構成要素ですね。御社では、そうしたレガシーの活用事業もしておられると伺いました。

**佐々木** 社内で新規事業を募集したところ、歴史的に意義のある建物を文化財ととらえ、これを保存・活用する活動に協力してはどうかというアイデアが出され事業化しました。これは東京の九段下にある歴史的建物「旧山口萬吉邸」を新たにビジネスインノベーション拠点として運用するもので、当社を含む3社にて実施しています。また神戸にある旧ジェームス邸は、チャペルを新築の上、邸宅を新たにレストランや結婚式場として事業者の方にご活用いただいています。私たちは建築会社として、壊して建て直すばかりではなく、環境保全やサステナブルな観点から、建物の保存と活用の両立、用途変更による新たな価値創造にも取り組んでいます。



旧ジェームス邸 (神戸市垂水区)

## パイロットからのお礼

**崎元** 御社が設立された「公益財団法人竹中育英会」では、年間60人ほどの学生に返還不要の奨学金を出されています。すばらしい取り組みですね。

**佐々木** 竹中育英会は、当社の創立者である竹中藤右衛門の「世のため人のために利益を社会に還元したい」という思いから1961年に設立されました。経済的理由で就学が難しい大学生や大学院生などに対して、返還義務のない奨学金を給付するもので、専攻や卒業後の進路も本人の自由です。私はかつて海外出張に行ったとき、搭乗した飛行機のパイロットから「その節は大変お世話になりました」とご伝言をいただいたことがあります。聞けば、竹中育英会の奨学金を受けて勉強し、パイロットになられたそうです。これ以外にも、いろんな機会でご感謝のお言葉をいただくことがあります。

## 大阪・関西万博への期待

**崎元** 2025年大阪・関西万博については、どのようにお考えでしょうか。

**佐々木** 当社は1970年の大阪万博で、ソ連館や松下館など約1/4の万博施設の建設に携わりました。「いのち輝く未来社会のデザイン」という開催テーマに沿って、関西における生命科学の先進性が示されると思いますが、当社としてはSDGsに示されている環境問題の解決にも貢献したいと考えています。当社が開発した耐火集成材の「燃エンウッド®」をパビリオン建設に使うなどして、環境に調和した持続可能な建築文化を発信できればと思っています。

また、現在、木造・木質建築を見直そうという機運が高まっています。利用者の健康や快適性について医学的な見地からも立証されていますが、小学校の校舎を木造にすると、子どもたちの声や元気が違うとおっしゃる先生もおられます。

**崎元** 林業に従事する人が減って、荒れ放題の山林があると聞きます。単に安価という理由で外国材に頼ってばかりいると、日本の山林が死んでしまうのではないかと危惧します。

**佐々木** そうですね。国内の樹木により、都市に木の建築をつくることで地方の森林産業を活性化できます。そして、樹木を切った後に新たに木を植え、その生長でCO<sub>2</sub>を吸収し、持続可能な森そして社会をつくる。当社は、このサイクルを「森林グランドサイクル®」と呼び、森林資源と地域経済の好循環を目指しています。そのためには、国産材を意図的に使うシステムをつくったり、材木の生産を近代化したりすることも重要です。大阪・関西万博では、そうしたことも注目されており、とても期待しています。

**崎元** 本日はありがとうございました。

### 佐々木正人氏

1953年兵庫県出身。1977年東京大学工学部都市工学科を卒業後、竹中工務店入社。開発計画本部課長、関西プロジェクト推進本部長、常務執行役員、専務執行役員、取締役専務執行役員などを経て2019年3月より現職。

### 株式会社 竹中工務店

大阪市中央区本町4丁目1-13(大阪本店)。資本金500億円(2020年3月現在)、売上高1兆3,520億円(2019年度連結)、従業員数7,630人(2020年1月現在)。グループ会社/国内13社(建設、マネジメント・エンジニアリング事業)、海外10社(建設、開発事業)。

(写真提供：株式会社 竹中工務店)